

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 22 日現在

機関番号：20101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21592843

研究課題名（和文） 事例分析による乳幼児の虐待事例・虐待リスク事例における父親の特性と心理社会的要因

研究課題名（英文） The Characteristics and the Psychosocial Factor of Fathers Who Abused Their Infants by The Case study

研究代表者

上田 泉（IZUMI UEDA）

札幌医科大学・保健医療学部・講師

研究者番号：90431311

研究成果の概要（和文）：乳幼児の虐待事例の検討会へ出席し、また、国内外の子ども虐待の父親特性に関する文献レビューを実施し、子ども虐待支援経験のある保健師へのインタビューを実施した。すべての得られたデータを総合し、乳幼児の虐待事例・虐待リスク事例における父親の特性として、家族関係を含む人との関係を構築することの困難さ、感情表出の難しさや自己本位な行動の特性が明らかになった。本研究より、父親自身を理解し、父親と援助関係を作ることの難しさ、父親が家族との関係を形成していくための支援技術を支援者が培うことが重要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：We analyzed data from cases as told to us through a semi-structured interview with public health nurses who had been in charge of services for child abuse, and review of domestic and international research papers on the characteristics of fathers regarding child abuse and cases report meeting of infants abuse. From the all these data, the characteristics of fathers who commit child abuse were the difficulty to build relationships with others includes emotional family relationship, and to express emotion and characteristics of selfish behaviors. The findings suggest the necessity for expert public health nurses to understand fathers, to be aware of the difficulty of building a supportive relationship with fathers, and to improve skills to help fathers form a good relationship with family members.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1400,000	420,000	1820,000
2010年度	1000,000	300,000	1300,000
2011年度	452,164	135,650	587,814
2012年度	547,836	164,350	712,186
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：子ども虐待・父親・保健師

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究課題の社会背景

児童虐待による死亡事例の検証結果（平成17年4月第17回社会保障審議会）により、全事例の死亡状況の概要が明らかになっている。児の年齢構成では0歳児が44%、1歳児が12%、2歳児が20%であり、全てが6歳以下であった。児童虐待の中でも乳幼児期は、虐待の早期予防における支援の必要性が高い。

わが国の母子保健施策は、各市町村で母子保健計画を策定し、妊娠出産、子育て期の過程を通して一連のサービスを体系的に推進している。その中で、保健師は虐待の事例ばかりではなく、いわゆる虐待リスクのある事例についても乳幼児期の早期から関わることができ、早期発見、予防への社会的期待も高い。

(2) 児童虐待リスクに関する研究の動向

日本における児童虐待に関する研究は、虐待のリスク要因の検討や早期発見のためのアセスメント指標の開発に関する研究は徐々に進んできている。父親による虐待は増加しているという報告がされている一方、母親による虐待に関する研究に比べて、父親による虐待に関する研究は少ない。

諸外国の研究論文を検討した場合、児童虐待リスク予測について父親と母親の比較研究、身体的虐待及びネグレクトのリスクのある父親とリスクアセスメント、父親役割に関する研究など、リスク予防のため父親そのものに焦点をあてた研究が進んでいる。その父親の要因とは主に、基本属性、父親役割、心理社会的要因等で分析され、虐待リスクのある父親とマルトリートメント（不適切な養育）する家庭の父親は本質的に同じであると指摘されている。

2. 研究の目的

事例分析を通して、乳幼児の虐待事例・虐待リスク事例における父親の特性と心理社会的要因について明らかにし、父親への支援上の課題について明らかにする。

3. 研究の方法

A県内の1保健所管内の3市町で協力が得られた自治体の保健センターで行われている保健所および市町村保健師の事例検討会に出席し、乳幼児の虐待事例・虐待リスク事例の情報を収集し検討する。さらに、国内外の子ども虐待の父親特性に関する文献を検討し、文献レビューを行う。また、事例を担当する支援経験のある保健師へのインタビューも同時に実施する。得られたデータを総合して検討し、乳幼児の虐待事例・虐待リスク事例における父親の特性と心理社会的要

因について明らかにし、父親への支援上の課題について検討する。

(1) 事例検討会の出席

北海道内の保健所管内で、児童福祉施設や医療福祉サービス等社会資源が比較的整備されている1つの地域を特定し、協力が得られる行政機関に依頼し、研究課題に関する情報収集、学習の機会とするため、子育て支援に関する事例検討会に出席した。

(2) 国内外の研究の文献レビュー

子ども虐待における父親のリスク要因についての研究を把握し、今後の子ども虐待における父親の特性に関する研究、実践上の課題を明らかにするために、国内外の研究の文献を検討した。

(3) 熟練保健師へのインタビュー

保健師がとらえる子ども虐待事例における父親の特性について明らかにすることを目的として保健所及び保健センターに勤務している母子保健業務の経験5年以上の保健師に半構造化面接を実施し、質的に分析した。

4. 研究成果

(1) 事例検討会に出席

子育て支援事例検討会に出席し、現地の保健分野での子ども虐待事例の把握方法、支援内容、支援体制などについて把握し、各職種の役割、連携内容について検討した。検討会での事例紹介、虐待の判断、支援内容等の検討に加わった。事例の父親の特性は、年齢、経済的状況、家族構成、性格特性など多岐にわたっていた。

(2) 文献レビュー

国内文献は、キーワード「児童虐待&父親」で105本が検索され、原著論文は68本であり、国外文献は、「Child Abuse&Father」で372本、「Child Abuse&Father&Risk」で149本が検索され、抄録のある論文は123本であった。合計、191本を文献検討の対象とした。父親の特性に関する記載がある国内文献7本、国外文献13本を文献レビューした。

国内外の研究結果を比較すると、明らかとなっている父親の属性要因は共通していなかった。国内の研究では、属性として、幼児期の被虐待経験、年齢35歳未満が挙げられていた。国外の研究では、属性として、人種（アフリカ系アメリカ人）、非雇用（無職）、全ての子どもの生物学的な父親ではない、父親代理として住んでいる等が明らかになっていた。

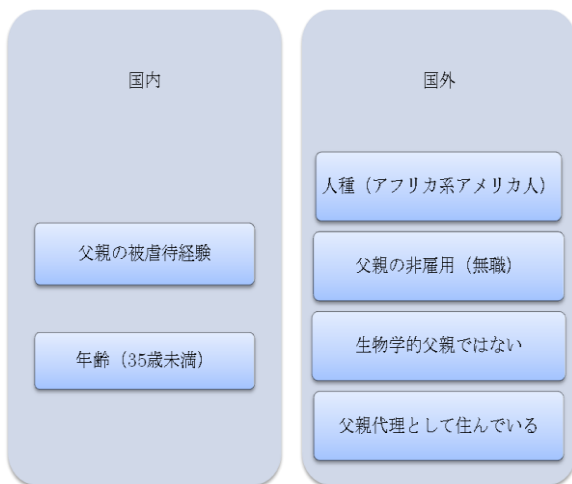


図1 子ども虐待における父親の属性要因

父親の心理社会的要因について共通していた項目は、夫のパートナーに対する暴力と、反感等の感情であった。国内では、母親の虐待傾向へ影響する要因として、父親の面倒な存在ととらえる児へ対する感情、父親のDV許容傾向という要因が明らかになっていた。国外では、子ども虐待の父親のリスク要因として、パートナーに対する暴力と反感等の感情以外では、パートナー、子どもに対する共感性が低い、客観的な受け止めが低い、父親自身の子どもへの態度、しつけ、怒り方等が挙げられていた。

国内外の研究に対する取り組みの違いは、子ども虐待が社会問題として取り組まれてきた背景の違い、家族背景の違いが考えられた。今後、日本において子ども虐待における父親の特性について研究を進め、父親に対する支援内容について検討することが課題であることが示唆された。

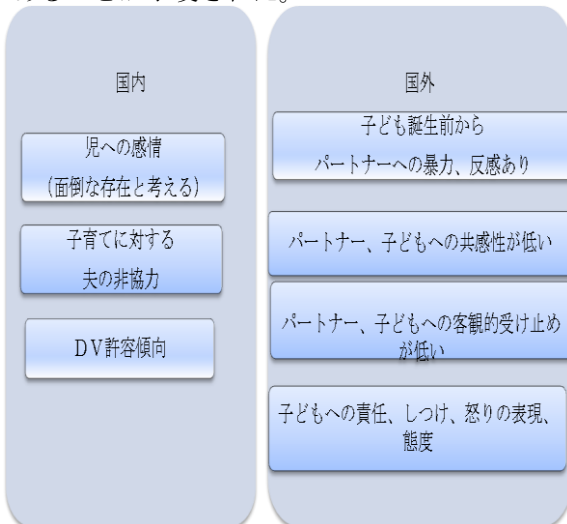


図2 父親の心理社会的要因

(3) 熟練保健師へのインタビュー

①対象者から語ってもらった事例は、全部で13事例であった。今回は13事例のうち、

まず両親によるネグレクトがあり、身体的虐待あるいは心理的虐待を複合している8事例を分析対象とした。

結果、見出されたカテゴリの中で、【家族と情緒的な関係を結ぶことが難しい】【家族以外の人との関係を求めることが難しい】というカテゴリは、父親の対人関係の特性であった。

父親は子どもとの関係性が形成されていない、また、母親と向き合えず母親とも安定した関係ができていない、実家の家族との関係もあまりよくない状況である。つまり、家族の誰とも情緒的な関係が結べていない状況が伺えた。

また、【感情、考えを表出することが難しい】【自分勝手な行動をする】【社会性に欠ける行動をとる】【攻撃的な態度と行動をとる】のカテゴリは、父親の行動の特性であった。

本研究より、父親自身を理解し、父親と援助関係を作ることの難しさ、父親が家族との関係を形成していくための支援技術を支援者が培うことが重要であることが示唆された。

②対象者から語ってもらった13事例のうち、虐待の種類はネグレクトであり母親の精神的不安定のみを呈している3事例を分析した。

結果、保健師がとらえる母親の精神的不安定を助長させると考えられる父親の行動特性は、【夫婦の問題を解決できず他人に話す】【家族の状況と問題に気付かない】【育児方法の正解を求めて行動する】【母親の代わりに率先して動き育児に口を出す】【自分の育児の頑張り強く主張する】の5カテゴリにまとめられた。

本研究より、父親の育児や家事に対する頑張り認め、悪循環を打開しうまく家族と関われるよう父親をエンパワメントするための支援技術が必要であることが示唆された。

(4) 考察

今回、明らかになった父親の特性について、国内外の文献レビューと保健師へのインタビューにおいて父親の心理社会的要因で共通していた項目は、夫のパートナーに対する暴力、反感等の感情、攻撃的な態度であった。また、インタビューで得られた家族関係や社会性に欠ける行動は、国外の研究で指摘されていたパートナー、子どもに対する共感性が低い、客観的な受け止めが低い、父親自身の子どもへの責任、しつけ、怒り方等と共通する部分があると考えた。

また、今回、保健師とのインタビューから得られた内容で、【感情、考えを表出することが難しい】【自分勝手な行動をする】とい

うカテゴリーは、父親の特性として着目すべき部分であると考えた。

前者は、自分の考えがなく感情も感じられないが、後者は、自分なりの勝手な考えがあるので、その意味では相反している内容と受け取れる。このような状況から、保健師が父親自身の考え、意図が把握し難い状況が窺える。この父親の理解に苦しむ行動こそが、子ども虐待事例の父親の特性の鍵となると考える。この背景にある父親の価値観、考え、感情等、父親自身の心理面を把握することが必要である。

保健師は子ども虐待支援において、家族支援における父親への支援の重要性を認識し父親と関わっていることが推察される。しかし、父親への支援困難な背景にはさまざまな要因があると考えられる。

単独で家庭訪問し父親に会って恐怖を感じた場合の対処方法、父親自身に明らかな疾患がない場合の父親への関わり方、子どもの成長発達や母親への支援を中心に关わりており父親役割についての伝え方等、これまで父親支援の研究報告もあまりないことから父親自身にどうアプローチすべきか戸惑いがあると考えられる。

子どもや母親と情緒的な関係を結べず父親としての役割がとれない父親に対してどう支援すべきか、父親自身の気持ちが表出されず自分勝手な行動をとる父親の行動をどう理解すべきか、保健師は父親支援において困難な状況にあることが窺える。

夫婦間の問題を解決できず家族の問題にも気付かない父親であれば、家族内の葛藤は高くなる可能性があり虐待のリスク要因となり得る。また、母親に対して育児に関する口を出し、自分の頑張りを主張し、母親の負担に気付かない父親であれば母親のストレスは高まる一方である。

保健師は母子保健活動を通して子どもの成長発達や安全を守りながら、母親を中心に育児支援、精神的支援を長期間継続して実践してきた。保健師による父親への支援、家族支援はまだ取り組み自体が明らかになっていなく課題である。

父親自身の攻撃的な態度や人との関係等、なぜそのような行動をとっているのかを把握することがまずは重要である。家族との情緒的な関係や育児協力等の具体的な方法を理解できずとっている行動なのか、弱みや否定的な感情等の何らかの感情を隠したい心理からとっている行動なのか、行動の背景に潜む父親の心理をまず把握することが重要である。その内容によってアプローチ方法が変わってくる。保健師による子ども虐待事例における父親支援は、今後、どのように具体的に取り組むかは未知数であり課題である。

今後、家族の支援をすすめていく時に父親

支援は必須であり、保健師は母子保健活動をとおして介入できると考える。今後は、父親の心理面についての理解を深め父親と援助関係を構築すること、父親自身をエンパワメントすることで家族全体の健康を目指す支援が重要であり、そのための支援技術を支援者が培うことが重要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①上田泉, 佐伯和子, 河原田まり子, 平野美千代, 和泉比佐子, 波川京子, 子ども虐待における父親の特性に関する文献レビュー, 子ども虐待とネグレクト, 12巻2号, 271-287, 2010, 査読有

〔学会発表〕(計3件)

①上田泉, 佐伯和子, 河原田まり子, 平野美千代, 和泉比佐子, 波川京子, 母親の精神的不安定を助長させる父親の行動特性, 第1回日本公衆衛生看護学会, 2013, 1. 東京

②Izumi Ueda, Kazuko Saeki, Mariko Kawaharada, Michiyo Hirano, Hisako Izumi, Kyoko Namikawa: The Characteristics of Fathers Regarding Child Abuse in Infancy based on interview cases by Expert Public Health Nurses. International Conferences in Community Health Nursing Research Biennial Symposium. Edmonton, Canada. 2011, 5

③上田泉, 佐伯和子, 河原田まり子, 平野美千代, 和泉比佐子, 波川京子, 子ども虐待リスクにおける父親の特性-文献レビュー-”日本子ども虐待防止学会第15回学術集会. 2009, 11. さいたま市

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:
発明者:

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上田 泉 (IZUMI UEDA)
札幌医科大学・保健医療学部・講師
研究者番号：90431311

(2) 研究分担者

佐伯 和子 (KAZUKO SAEKI)
北海道大学・大学院保健科学研究所・教授
研究者番号：2026454
河原田 まり子 (MARIKO KAWAHARADA)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：90374272
平野 美千代 (MICHIO HIRANO)
北海道大学・大学院保健科学研究所・准教授
研究者番号：50466447

(3) 連携研究者

和泉比佐子 (HISAKO IZUMI)
札幌医科大学・保健医療学部・准教授
研究者番号：60295368
波川京子 (KYOKO NAMIKAWA)
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・教授
研究者番号：30259676